

グリーンコープ30周年記念特別企画 30th Anniversary ありがとう これからも

グリーンコープ 30周年記念 特別企画

民衆交易



「いのち・自然・暮らし」を守り 南の人々と共に生きる

グリーンコープのバナナには「民衆交易」という名前がついています。この言葉には、実はとても深い意味が込められています。「民衆」とは、困難な状況でも自らの力で生きていこうとしている南(開発途上国)の人々と、北(先進国)の私たち。「交易」とは、南と北の民衆が対等な立場で「モノ」を交換することで連帯する「コト」。

南と北の人々が共に生きていくことをめざして、グリーンコープは南の人々と連帯を30年以上の歳月をかけて育み、深めてきました。そこには、グリーンコープの理念である「四つの共生(自然と人・南と北・女と男・人と人)」がしっかりと息づいています。そして今、連帯はアジア各地へ広がり、南の人々同士の連帯へと発展しています。

民衆交易の「はじまりから今」をお伝えします。



ネグロスの人々の自立のため 「無条件」の連帯を

搾取と抑圧の 社会が生んだ飢餓

1985年、「フィリピン」ネグロス島で15万もの子どもたちが飢餓で死に瀕している。救いの手を！というメッセージが、現地から世界中に発せられた。自然災害による凶作が原因ではない。数百年に及ぶ植民地支配を経たネグロス社会に横たわった搾取と抑圧の構造が生んだ。つくられた飢餓だった。

砂糖の島と呼ばれたネグロス。農地の大部分を握り、地主が所有し、そこでは輸出用サトウキビのプランテーション栽培が行われていた。島民の多くは、サトウキビの栽培・刈取り、サトウキビの労働者として働いてきた。それ以外の時期は地主から借金して何とかしのぐというギリギリの生活を強いられる。1980年代初頭、砂糖の国際価格が暴落、地主たちはサトウキビの栽培に見切りをつけ、農園を閉鎖してしまふ。雇っていた労働者たちを顧みることにはなかった。数十万もの砂糖労働者が収入の道を断たれ、サトウキビを作らなくなった農地で他の作物を作ることも許されず、その日の食料すら手に入れることができなくなった。ネグロス島全域が深刻な飢餓に見舞われた。



誰のいのち・自然・暮らしを守るのか

ネグロスの飢餓を知った日本の生協や市民団体は、1986年、日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)を立ち上げ、緊急支援に乗り出す。グリーンコープの前身生協の一つ、共生社生協も支援に加わった。同じ頃、やはり前身生協の「ちぐれん」も、ネグロスの支援に動き出した。組合員たちは「ネグロスってどこ? どうしてそんな状況に? 私たちは何をすれば? この目で見よう!」とネグロスへ飛び、現地の病院で、痩せ細った大勢の子どもたちに衝撃を受けた。抱き上げ「紙袋みたいに軽い」と涙した。そして考えた。「私たちは『いのち・自然・暮らし』を守ろうと言ってきた。でも、誰の? 自分の子どもや家族が安全ならいいのか。同じ地球に暮らす人々の『いのち・自然・暮らし』を守らなければ、自分たちを守ることもできない。そこから、ネグロスとの連帯が始まることになる。

1987年にネグロスを視察した 組合員の報告

共生社生協ほくちく(グリーンコープ前身生協の一つ)理事 倉本 福枝 さん (共生社生協機関紙「人間の時代」1987年11月号より抜粋)

同じ人間として、この地球に「生」を受けている私たちが、遠い国の出来事と片付けてしまえば余りにも傲慢すぎると思えます。飢えて消えていく生命は、先進国と呼ばれている国々の犠牲ではないでしょうか。

交易するモノを生み出し 連帯という「コト」へ

支援が始まって1年余りたった頃、砂糖の国際価格が戻り、地主は農園を再開。砂糖労働者たちは再び過酷な労働に戻った。日々を生き抜くことに精一杯な彼らにとって、土地を得て自立するなど思いもよらないことだった。他国の支援団体が引き上げていく中、JCNCはネグロスの人々に寄り添い支援を続けたことで、彼らの意識は次第に変わっていった。「日雇いの労働

者のままでは、子どもたちの代も奴隷のような生き方しかできない。自立して生きするための手段が必要だ」と思い至る。そうして生まれたのがこの言葉だった。「我々は魚ではなく、魚を獲る網が欲しい」。自立に向かう決意を支援者たちに伝えた。彼らがその手段として考えたのが、ネグロスで伝統的に作られてきた黒砂糖マスコーパド糖を復活させることだった。組合員は、それを商品化して共同購入で利用するという形で、ネグロスとの連帯を模索していく。



最初の製糖所は、藁ぶき屋根で壁もない小屋。そこで作られたマスコーパド糖には、葉などの異物が混じっていた。多くのクレームもあつたが、各地で学習会等を開催してネグロスの窮状を共有し、利用することで自立を応援しようと呼びかけた。組合員は「連帯に条件はない」と考えたのだ。

ネグロスから見たグリーンコープ

ネグロスとグリーンコープのかけ橋となった 大橋成子さんに話を聞きました。



私が1991年に初めてネグロスを訪れた頃、フィリピンは内戦状態で、農民たちは軍の横暴に耐えながらも地主から土地の権利を返してもらおうと闘争をしていました。私はネグロスの人々の温かく素朴な人柄にふれ、この人たちがどう自立していくのかを見てみたいという思いに駆られました。それから30年近く、ネグロスとグリーンコープの連帯をこの目で見てきました。

現地の人々と共に 一から商品を生み出した

「民衆交易」とは、お金の力でモノを持って来るのではなく、昔、山の人と海の人があがきのこと塩を取り換えたような「交換」の関係なんです。交換するだけではなく、一から一緒に商品を作った。そこにあるのは「無条件の連帯」でした。

マスコーパド糖の輸出が始まった時、それは異物が混じった、とても商品と言えるものではあり

幾多の試練も 共に乗り越えた

民衆交易バナナは、日本に初めて輸入された無農薬バナナです。今では当たり前のようにきれいな状態で届けられますが、最初のテスト出荷で届いたバナナは真っ黒に腐っていました。ネグロスではグリーンコープもかんかん怒っているだろう。この事業は続けられないかも知れないと覚悟していましたが、ところがやってくると兼重さん「テスト出荷は成功しましたよ。ちゃんと日本に着きました」と満面の笑みで言っていました。ただバナナが黒くなったこと。次は黒くせずに送ることを

一緒に考えよう。ネグロスの人たちは仰天しました。まだやるのかと。それから数年間、行錯誤を重ね、やっと熟度管理がうまくいき、本格的な出荷へとつながりました。

当時のバナナ農民には三つの夢がありました。「子どもたちに1日3回白いごはんを食べさせたい。年に3〜4枚新しいTシャツを買ってやりたい。高校までは進学させたい」。幾度の大規模台風被害に見舞われながらも、ようやくバナナの生産輸出が軌道に乗る。夢が叶いかけた矢先、またしても大きな試練に襲われました。病虫害でバナナがほぼ全滅してしまつたのです。生産者からは「二度いいから殺虫剤をかけて駆除したい」という声も上がりました。でも兼重さんは言いました。「それは違うんですよ。クキソウムシも悲しいんだ。堆肥をやることもせず手当たり次第にバナナを植えたため、土壌中の微生物が減り、それをエサにしていたクキソウムシがバナナに入つたんです。「まずは土壌を豊かにしながらおいしいバナナを作ってください。組合員は待っていますから」と。そこから生産者たちの土作りの努力が始まりました。バナ



大橋成子さん

1991~94年(オーラル・トレード・ジャパン(A.T.J))で「バナナ村自立開発5ヶ年計画」を担当。1994~2007年(日本ネグロスキャンペーン委員会(JCNC))でネグロス駐在員。2008~12年(PLA)でネグロス駐在員。2017年~グリーンコープ共同顧問。



1989年、グリーンコープから組合員と職員が視察団としてネグロスを訪れた

「一緒に考えよう。ネグロスの人たちは仰天しました。まだやるのかと。それから数年間、行錯誤を重ね、やっと熟度管理がうまくいき、本格的な出荷へとつながりました。当時のバナナ農民には三つの夢がありました。「子どもたちに1日3回白いごはんを食べさせたい。年に3〜4枚新しいTシャツを買ってやりたい。高校までは進学させたい」。幾度の大規模台風被害に見舞われながらも、ようやくバナナの生産輸出が軌道に乗る。夢が叶いかけた矢先、またしても大きな試練に襲われました。病虫害でバナナがほぼ全滅してしまつたのです。生産者からは「二度いいから殺虫剤をかけて駆除したい」という声も上がりました。でも兼重さんは言いました。「それは違うんですよ。クキソウムシも悲しいんだ。堆肥をやることもせず手当たり次第にバナナを植えたため、土壌中の微生物が減り、それをエサにしていたクキソウムシがバナナに入つたんです。「まずは土壌を豊かにしながらおいしいバナナを作ってください。組合員は待っていますから」と。そこから生産者たちの土作りの努力が始まりました。バナ



カネシゲファーム・ルーラルキャンパス ネグロスにある有機農業を学ぶための学校。実践農場やセミナーハウスを備える。若者が誇りを持って農畜産業ができるように、ネグロスとの連帯の象徴として2009年に設立された。ネグロスの人々の自立に尽力した故 兼重正次さん(当時、グリーンコープ連合専務理事)を偲んで名づけられた。

※1 自立基金は、交易の基盤を整えることに伴い、1996年から毎年5万円減額され、2001年から価格は含まれなくなった。 ※2 農産物に地域の自立をめざすアジアの人々が出会い、経験を分かち合うことを目的に、2008年に発足した。

グリーンコープが育んだ 「産直」の関係をバナナでも

ネグロスの人々の自立を継続的に支援するには、マスコーパド糖の利用だけでは十分ではない。そこで、ネグロス山間部に自生しているバナナを輸入できないかという話になった。当時日本では、農業や化学肥料を多用したプランテーション栽培のバナナしか手に入らず、組合員からは安心・安全なバナナがほしいという声があがっていた。

「南と北の共生」を カタチにする

ネグロスの民衆とグリーンコープの組合員や職員、JCNC(現APLA)などが共に手を携え、努力し、幾多の試練を乗り越えて、今、私たちは安心・安全でおいしいバナナを食べることができています。ネグロスの貧しかった人々は自立して、農民としての誇りを持つようになつてきた。産地もフィリピンの各地に広がり、より多くの人々の自立につながっている。



Banana

